

2020年9月1日
北近畿経済新聞(2面)に掲載されました



22
深い穴を掘るなら
広く掘ろう
専門分野の広げ方

「深い穴を掘るなら広く掘れ」といわれます。確かにそうで、針やドリルの先でつついても、ただか掘れる深さは知れています。深い穴を掘るのなら、それに応じた広さが必要なのです。仕事でもまた同じことがいえます。たとえば技術担当の人が、自分の専門分野をさらに掘り下げていこうとするなら、専門以外の分野にも広く興味を持って勉強することが大切です。

当社の社内テキスト三部作の一つ『サ・プロフェッショナルへの道』には庭園の見方、石の配置の狙い、小説の読み方までを掲載しています。たとえば一例としてあげているのが京都・建仁寺にある「○△□乃庭」。

中ほどに、まるく盛り土して植樹されているところがあり、○の意味はすぐわかります。四角形の井戸もあるので□の存在もわかるのです。でも、いくら目を凝らしても△が見当たらず、ここで首をかしげてしまう方も多いようです。△はじつは庭の端に砂盛りされた台形(梯形)の左右の辺を延長させると、庭の外側で線が交わり浮かび上がってくる形。漠然と見ているだけでは、あるいは△は庭という枠内にあるものだという固定観念で探しているだけでは△は見えません。

当社では、○△□乃庭の例を活用しながら、枠に囚われていたのでは、技術開発の新しい発想は生まれまいというところを学んでいくのです。

人間の心理や時代の流行、あるいはもっといえば、雑学的なことにまで関心を持たれることが必要でしょう。そうしてはじめて専門の奥行きが出てくるのです。

専門書など深く理解しながら読むのが「読書」。雑誌などを全体にわたって広く広く目を通すのを一般には「通読」といいますが、「読書」に対して「見書」と造語してもらいかも知れません。「読書」で「見書」でいいのも大切です。

技術に限らず、営業にしても経理の仕事にしても、それぞれの専門をより深めようとするなら、「深い穴を掘るなら広く掘る」を実践していただきたいものだと感じます。

※「人生の「ねじ」を巻く77の教え」より転載



人生の「ねじ」を巻く77の教え
著者 日東精工株式会社 企画室
発行所 株式会社ボプラ社
1,000円(税別)で販売中